

「知の探研」× 多文化共修  
—オンライン授業再構築の試み—

山本 由美子（岡山大学学術研究院 共通教育・グローバル領域（GDP））  
グエン・カ・マン（岡山大学グローバル・ディスカバリー・プログラム）

*Chi no Tanken* (Inquiries of Knowledge) meets Multicultural Collaborative Learning:  
Transforming a Japanese Online Course for Global Learners

Yumiko YAMAMOTO

(Faculty of General and Global Studies (GDP), Okayama University)

Kha Manh NGUYEN

(Discovery Program for Global Learners, Okayama University)

### 要旨

岡山大学では2025年4月入学生から新カリキュラムがスタートした。学士課程改革の一環として導入されたのが全学共通・課題探究科目「知の探研」である。本稿では、新入生対象科目である「知の探研」を、海外生を含むグローバル・ディスカバリー・プログラム生向けに英語で“*Inquiries of Knowledge*”として開講した初年度の取り組みを報告する。とりわけオンデマンド型オンライン授業を、本学が推進する多文化共修の視点で再構築するにあたり、教材を単に英訳するのではなく、オンライン環境においても協働学習を実現する工夫や、言語的・文化的配慮の統合が不可欠であることを明らかにする。

### Abstract

Okayama University launched a new undergraduate curriculum in April 2025. As part of this reform, *Chi no Tanken*, a general education course required for incoming students, was introduced. This paper reports on the first-year implementation of the course, offered in English as *Inquiries of Knowledge*, for students in the Discovery Program for Global Learners, many of whom are international students. Reconstructing the on-demand online course from a multicultural collaborative learning perspective required more than simply translating the materials into English. It also necessitated developing pedagogical strategies to foster collaborative learning in the online environment and to integrate linguistic and cultural considerations.

キーワード：多文化共修，協働学習，探究型学習，オンデマンド型オンライン授業

## 1. はじめに

岡山大学は、2025 年度に「Target2025」と銘打った新しい学士課程教育を設置した。これは、高等学校の新学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」を経験した学生が入学する年度に合わせた改革である。改革のポイントは、①チームで協力して課題に取り組む新科目「知の探研」の導入、②生涯にわたって英語の自己学習を可能にする基盤の育成、③他学部教員から学問観や考え方を学ぶ仕組みの構築の3点である<sup>(1)</sup>。大学は「教えるから学ぶへ」をスローガンに、学習者中心の教育を志向している。新しい学士課程は「全学共通科目」「英語科目」「専門科目」の3区分から成り立つ。

2017年10月にスタートした本学の学士課程「グローバル・ディスカバリー・プログラム（以下、GDP）」は、次節で述べるように Target2025 改革を先取りしていたといえる。Target2025 の設計段階では、GDP 生も全学部生対象の「知の探研」の対面授業に参加する案が検討された。しかし、GDP では英語を共通言語としていることや、学生が4月と10月の年2回に分かれて入学することなどの理由から、最終的には GDP は別枠で取り扱われることとなった。しかしその頃刊行された2025年度『大学案内』には、教学担当理事が「知の探研」は「新入生全員が履修する科目」と明言している（岡山大学、2024, p.4, 筆者強調）。実際、2024年度以前は GDP 生も全学ガイダンス科目を英語でも受講していた。とりわけ10月入学の海外生を新カリキュラムから除外することは、本学の国際化方針や、本学が推進するSDGsが掲げる「誰一人取り残さない」という理念と整合しない。

本稿では、課題探究科目「知の探研」を GDP 生向けに英語で“*Inquiries of Knowledge*（以下、IOK）”として開講した初年度の取り組みを報告する。次節では、既存の新入生ガイダンス科目の枠組みを活用して IOK を導入した経緯を整理する。第3節では、オンデマンド型オンライン授業の再構築について述べる。なお、IOK 開講決定後、本学は令和6年度に文部科学省「大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業」に採択された。GDP における IOK の取り組みは、本学の国際化を一層推進し、多文化共修のモデルとなることが期待される。

## 2. GDP の位置付けと1年次カリキュラムの変遷

### 2.1 GDP 設立の背景

GDP は、文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」事業に採択された PRIME（PRactical Interactive Mode for Education）プログラムの柱の1つとして2017年に開設された。主に日本国内の高校から集まった約30名の国内生は4月に、世界各地から集まった約30名の海外生（留学生・帰国生など）は10月に入学する。こうして計60名が1学年を構成し、英語を共通言語として学修を進める。グループワークやディスカッションを基盤とする科目が多く、学生は各自の興味や関心に応じて履修プログラムを組み立てる。文理融合のカリキュラムや、他学部が提供する日本語による専門科目の履修も可能であり、卒業時には学士（学術）が授与される。

これまで約 40 カ国から留学生を受け入れてきたが、この統計には帰国生が以前居住していた国々は必ずしも含まれていない。これらの国々を加えると、関係する国は 40 カ国を超える。また国内生にも外国籍や複数のルーツを持つ学生が在籍しており、その多様性は国籍にとどまらず、年齢・宗教・民族・言語など多岐にわたる。こうした多様性を理解し協働する経験を通じて、学生は課題発見力や解決力を高める。卒業生を輩出してまだ 5 年余りだが、大学院進学や就職を通じてすでに 10 数カ国で活躍しており、「世界で活躍できる「実践人」の育成」を目的とした PRIME プログラムの成果は表れつつある。

## 2.2 2024 年度までの必修科目の概要

まず、教養教育科目として以下の必修科目が全学で設定されていた。

- 全学ガイダンス科目「岡山大学入門」「キャリア形成基礎講座」（各 0.5 単位）および学部ガイダンス科目（GDP では「ディスカバリーガイダンス」）（1 単位）、計 2 単位
- 情報リテラシー系科目「情報処理入門 1」（1 単位）
- 高年次教養科目（1 単位）
- 知的理解科目（各 1 単位）、計 6 単位

これらのうち、全学ガイダンス科目、学部ガイダンス科目、および「情報処理入門 1」は 1 年次に開講されていた（表 1）。GDP の 4 月入学生は他学部生と一緒に日本語で、全学ガイダンス科目である「岡山大学入門」「キャリア形成基礎講座」と「情報処理入門 1」を 1 学期に受講していた。同内容の授業は、3 学期に 10 月入学生向けに英語で開講されていた。

学部ガイダンス科目「ディスカバリーガイダンス」においては、4 月生は 2 学期に主に日本語で、10 月生は 4 学期に英語で受講した。これはオムニバス形式の授業で、GDP 専任教員による 3 つのクラスター（科目群）の紹介に加え、9 学部の教員らが学部・学科での学びや研究を紹介した。学生は入学後しばらく落ち着いた時期にこの授業を受けることで、4 年間の学修計画を主体的に立てることができたと言えよう。

GDP 以外の学部生には専門教育における必修科目に加えて、教養教育科目から英語科目および 2021 年度から導入された「数理データサイエンスの基礎（1 単位）」が必修として課されている。一方、GDP には英語を第一言語とする学生も入学するため、教養教育科目の英語科目は必修としなかった。また「数理データサイエンスの基礎」については、英語で開講する準備が整っていなかったことから、日本語力のある学生のみが選択科目として履修する状況にとどまっていた。

表 1. GDP 新入生対象必修科目の変遷

2017 年度～2024 年度入学生				
	1 学期	2 学期	3 学期	4 学期
教養教育 科目	情報処理入門 1* 岡山大学入門* キャリア形成 基礎講座*	ディスカバリー ガイダンス (日本語)	情報処理入門 1** 岡山大学入門** キャリア形成 基礎講座**	ディスカバリー ガイダンス (英語)
GDP 共通 セミナー	ディスカバリー セミナー II (英語)		ディスカバリー セミナー I (英語)	
2025 年度入学生以降				
全学共通 科目	情報処理入門 1*		情報処理入門 1** 数理データサイエン スの基礎 (英語)	
学際基礎 科目 (知 の探研)	IOK オンデマン ド受講 (日本語) IOK II (英語)		IOK オンデマン ド受講 (英語)	IOK I (英語)

\* 4 月入学生は他学部生とともに日本語で受講。

\*\* 10 月入学生が英語で受講。

GDP 専門教育における必修科目は「卒業研究」の他、共通セミナー3 科目（計 3 単位）がある。新入生対象の共通セミナーの 1 つが「ディスカバリーセミナー I (1 単位)」であり、毎年 3 学期に開講された。10 月入学生とその半年前に入学した 4 月生の計 60 名（初年度は 10 月入学生のみ）が受講し、多様な背景を持つ学生同士がグループワーク等を通じて協働し、異文化コミュニケーション能力や異文化への感性を養うことを目的としていた。もう 1 つは 1 学期開講の「ディスカバリーセミナー II (1 単位)」で、新年度 4 月入学生と半年前に入学した 10 月生の計 60 名が受講した。異文化コミュニケーション力の育成に加え、大学での学びに必要なアカデミック・スキルの習得も目的とした。「ディスカバリーセミナー I・II」のグループ分けにあたっては、4 月生・10 月生の人数バランスに加え、国籍やジェンダーにも配慮して編成した。これら 2 科目を通じて、同時期に入学した同級生との「横のつながり」に加え、半年前・半年後に入学した同学年生との「縦のつながり」も構築される。こうした関係性により、学生はその後の多文化共修へと円滑に移行できるようになる。最終学年最終学期には 3 つ目の共通セミナーとして「ディスカバリーセミナー III (1 単位)」がある。これは卒業研究の成果を共有し、分野横断型な議論を行うことで、4 年間の学際的な学びを総括する科目である。

### 2.3 2025 年度以降の必修科目の概要

Target2025 の導入により全学ガイダンス科目と高年次教養科目は廃止され、知的理解科目は選択必修科目となった。一方、英語科目、「情報処理入門 1」、および「数理・デー

「タサイエンスの基礎」は引き続き必修科目として開講されることとなった。さらに、各学部が提供する「英語で学ぶ専門科目（2単位）」が新たに必修として追加された。しかし GDP においては、専門科目の多くが英語で開講されていることから、前述のとおり英語科目と、「英語で学ぶ専門科目（2単位）」を必修としなかった。その代わりに、「数理データサイエンスの基礎」を3学期に英語で必修科目として開講することとした。

さらに改革のポイントである「知の探研（3単位）」が新たに必修科目として導入された。新入生はまず1学期に Moodle を用いたオンデマンド授業を受講し、続く2・3学期には、教育推進機構の教員と各学部から選出された教員がペアを組み、計48名の教員によって24の異なるテーマで対面授業が実施される。学生の希望調査に基づき、対面授業は学部横断的に約100名ずつのクラスに編成される。学生は、いずれかの学期に週1回4コマの授業を8週間受講し、グループ演習などに取り組む。GDP はこれとは別枠で取り扱われることとなったのである。

Target2025 導入に先立ち、2024年度末には GDP 専任教員間で2回 Faculty Development (FD) を実施し、カリキュラム変更について教務委員会や教員会議で議論を重ねた。「知の探研」については、「ディスカバリーセミナー I・II」と「ディスカバリーガイダンス」の計3単位をオンデマンド授業および「IOKI・II」の受講へ置き換える形で GDP 生向けに開講することとした。オンデマンド授業の内容は全学版を基礎としつつ、必要に応じて GDP 生向けに調整することについては、Target2025 課題探求班の教員からも承認を得た。

「知の探研」オンデマンド授業の教材は、岡山大学共通教育部門の教員らによって作成された<sup>(2)</sup>。教材は、対面授業におけるチーム学修の前提となる知識や心構えを示した「知の探研7か条」で構成されている。7か条は以下のとおりである。

- 第1条 関心を寄せる
- 第2条 協力を惜しまない
- 第3条 方法を再考する
- 第4条 現在地を知らせ合う
- 第5条 時間を大切にする
- 第6条 予想外を楽しむ
- 第7条 差異を認め合う

Moodle コースページには、各条に対応する (a) 資料 PDF と音声ファイル、(b) 振り返りテスト（5択問題など）、(c) 授業外学修のためのブックリストが用意されている。さらに、各400字程度の中間エッセイと期末エッセイの提出も課されている。

英語版教材の準備期間が限られていたため、日本語での授業履修を前提として入学している2025年4月入学の GDP 生には、まずは全学版を日本語で履修させることとした。ただし、別途 Moodle コースページを作成し、課題探求班が作成した教材を一部修正して提供した。修正理由は2点ある。

第1に、全学版には2・3学期の対面クラス希望調査のためのアンケートフォーラムが設けられていた。しかし GDP 生は他学部生とともに2・3学期の対面授業に参加しないため、当該フォーラムのセクションを削除する必要があった。

第2に、全学版の中間エッセイの課題テーマが「高校までの探究と大学での研究についてのイメージをまとめる」であった。しかし、4月入学生には、高校で課題探究を経験していない留学生も含まれるため、全員に同一テーマを課すことが適切でない。そのため、中間エッセイの課題は、「知の探研」7か条の第1条「関心を寄せる」に基づき、「授業外学修のためのブックリスト」等を参考に、学生が自ら興味をもつテーマの本を中央図書館で選んで借り、読書を行う形式へと変更した。図書館での資料探索や読書体験を通じて、自分の関心を見だし深めることができるためである。さらに、図書館利用の経験も含めてリフレクション（省察）を記述することを求めた。なお、10月生については日本語能力が受験条件とされていないため、3学期には英語版のオンデマンド授業教材を作成する必要がある。この点については次節で述べる。

オンデマンド授業と並行して、1学期に「IOK II」、4学期に「IOK I」を開講する。いずれも水曜5・6限の2コマを用い、7週間で実施する（8週目は期末エッセイ提出日）。初年度の「IOK II」は、専門分野の異なる2名の GDP 教員が担当し、2024年10月生と2025年4月生の約60名が履修した。4月生・10月生のバランス、国籍、ジェンダーなどに配慮し、5～6名のグループを10組編成し、前半4週と後半3週で入れ替えることで、より多様な学生と交流できるよう工夫した。授業は、1週目に目的と概要の説明およびアイスブレイキングを行い、2～4週目に「リベラルアーツ教育」、5～7週目は「平和」をテーマとして展開した。事前学習に基づくグループ・ディスカッションを中心に、学生は学びを深めていった。

「IOK I」には、2025年4月入学生と同年10月入学生の約60名が受講する。「IOK I」を3学期ではなく4学期に配置したのは、3学期の同時間帯に新必修科目「数理データサイエンスの基礎」が開講されるためである。IOK I は、この科目を踏まえ、自然科学と社会科学の両面から「データ」について探究することを目的としている。

最終学年最終学期には、3つ目の共通セミナーである「ディスカバリーセミナー III」を、内容は変更せずに、2025年度入学生から「IOK III」として開講する。すなわち GDP において「知の探研」は1年次に限られる科目ではなく、大学4年間にわたる学びの理念と位置付けられている。

### 3. 多文化共修型教育に向けたオンライン授業の再構築

#### 3.1 学習者の思考を促すオンデマンド教材への転換

日本語版のオンデマンド教材は、主として日本の高校出身者を対象に設計されており、振り返りテストなどは、日本の教育に一般的な「選択肢から正解を選ぶ」形式を前提とし、

思考過程より知識の正確さに重点が置かれている。したがって、海外生を含む多文化共修に対応するためには、単なる英訳にとどまらず、文化的かつ教育的な媒介が必要となる。

ニューマーク (Newmark, 1988) は翻訳を、単なる逐語訳ではなく、言語に埋め込まれた文化的意味を考慮する行為と位置づけている。ピム (Pym, 2014) はスコポス理論を踏まえ、翻訳は原文との逐語的対応ではなく、目的言語における伝達目標を優先すべきであると述べている。これらの観点から、IOK の教材は多様な背景を持つ学生を想定し、単なる知識伝達ではなく、学生同士の協働、分野を超えた学際的な学び、そして「学習者が思考する」ことを重視し、さらにそういった学びが1年次にとどまらず、4年間にわたって継続することを念頭に再構築した。

(a) 資料 PDF の翻訳には ChatGPT5 を用い、文脈や言語に埋め込まれた文化的意味を踏まえて英語話者向けに調整した。音声ファイル (MP3) は「知の探研」の企画を担当した課題探求班の男性教員 2 名<sup>(3)</sup>による対話で構成されている。音声ファイルは Whisper 社の TurboScribe (<https://turboscribe.ai/ja/>) を用いて文字起こしをおこなったが、英語版では制作効率および言語文化学的な観点を考慮し、対話形式からナレーション形式へと改めた。その際、文字起こしされた日本語特有の文脈依存的・間接的表現 (Loveday, 1986) を直訳するのではなく、学習者に直接語りかける表現へと再構築した。例えば、日本語版で頻繁に用いられる「皆さん」という呼びかけを “everyone” と翻訳するのではなく、“What do you think of ...?” や “Are you the type of person who ...?” など、学習者個人に思考を促す “you” を用いた表現に置き換えた。これにより、学習者が新しい概念を自分事としてとらえ、主体的に思考する時間を確保できる。また、PowerPoint スライドに音声を付与して動画 (MP4) に変換したことで、編集や再収録も容易になった。

(b) 振り返りテストは、従来の 5 択問題からリフレクション型の自由記述に変更した。英語版では Moodle のオープンフォーラムを活用し、各条に関連する問いを提示した。例えば第 6 条「予想外を楽しむ」の振り返りテストは、日本語版では「Creative thinking とは何か。不適切なものを選べ」といった選択式問題であった。しかし英語版では、第 6 条の学習内容に沿って、“Why do you think it’s important to stay curious and open-minded, especially when your results or experiences don’t meet your expectations? (思ったように結果が得られなかったり、経験が期待どおりでなかったりする場合でも、なぜ好奇心を持ち、柔軟な姿勢でいることが大切だと思いますか)” と、自由記述式の問いに改めた。この変更には、i) 理論と自身の経験を結びつけるリフレクションの促し、ii) 自分の言葉で語ることによる記憶定着と主体的な学習を支援し、iii) フォーラム上で多様な学生が交流し、協働的知識構築を可能にする効果を期待した。

さらに、(c) 授業外学修のためのブックリストには、大学の中央図書館で借用可能な英語文献を追加した。これは海外生への配慮であると同時に、国内生にとっても「生涯にわたって英語の自己学習を可能にする」という Target2025 の改革方針を支える基盤づくりと

なる。こうして英語版教材は、単なる翻訳ではなく、好奇心・クリティカルシンキング・リフレクション・協働といった「知の探研（IOK）」の核心的価値を育成し、多文化共修を実現する教育ツールとして再構築された。

### 3.2 多様性と文化的文脈に配慮した英語版教材の再設計

GDP は Target2025 の設計段階において別枠として扱われた経緯があるため、日本語版資料ではその存在が見えにくくなっている。例えば、第1条「関心を寄せる」の学生同士の交流を促す資料には、本学の学部生を約 10,000 人とし、10 学部の入学者数のみが列挙されていたが、GDP は含まれていなかった。そこで英語版では『OKAYAMA UNIVERSITY OUTLINE 2024-2025』（Okayama University, 2024）を参照し、GDP 生や大学院生の内訳も加えて示した（図1）。

図1：英語版スライドに記載した在籍学生数

Undergraduate Students		Total 10,140	Graduate Students		Total 3,243
Classification	Total		Classification	Total	
School of Letters	758		Graduate School of Education	143	
School of Education	1,140		Graduate School of Humanities and Social Sciences	281	
Faculty of Law	949		Graduate School of Natural Science and Technology ※	110	
School of Economics	1,058		Graduate School of Environmental, Life, Natural Science and Technology	1,297	
School of Science	670		Graduate School of Health Sciences	127	
Medical School	1,332		Graduate School of Environmental and Life Science ※	113	
Dental School	314		Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences	875	
School of Pharmaceutical Sciences	433		Graduate School of Interdisciplinary Science and Engineering in Health Systems	236	
School of Engineering	2,716		School of Law	61	
School of Environmental Science and Technology ※	25		<b>Total</b>	<b>3,243</b>	
School of Agriculture	517				
Discovery Program for Global Learners	228				
<b>Total</b>	<b>10,140</b>				

Source: Okayama University HP, accessed on August 15, 2025.

また、第7条「差異を認め合う」の「チーム内の多様性」を扱う資料では、男女比や出身高校の所在地が都道府県別に示されていた一方、留学生は「その他」に一括されていた。前述のとおり、GDP には留学生や帰国生を含む多様な学生が在籍しているため、英語版では日本語版スライドの情報に加え、多くの国から学生が集まっていることを明示し、さらに国籍以外の多様性要素（年齢、民族性など）についても全面的に紹介するよう変更した。

翻訳にあたっては、文化的背景を共有しない受講者にどのように意味が伝わるかという点も重要となる。例えば「就活（しゅうかつ）」は直訳すれば *job hunting* となるが、日本の新卒一括採用やリクルートスーツ文化など固有の社会的文脈を伴うように、説明的補足が必要となる場合がある。

一例として、第2条「協力を惜しまない」に登場する俗語「ガチャ」を取り上げる。これは「チームガチャ」のように、教員がチームを割り振る際に生じるメンバー構成の当たり外れを指す比喻であり、本教材ではそれを「学びの機会としてとらえ直す」という文脈で紹介している。英語版では「ガチャ(*gacha*)」をいう語を残しつつ、「カプセルトイのラ

ンダム性に由来する比喩であり、人生や環境が個人の選択を超えた偶然によって左右されることを指す」という説明を加え、さらに皮肉や逃避のニュアンスを含む場合があることも注記した。

ただし、日本語版に掲載されていた「国ガチャ」「身長ガチャ」「顔面ガチャ」などは差別的表現となり得るため削除し、英語版では「親ガチャ」のみを例示した。「親ガチャ」は、生まれ持った家庭環境や社会的背景を偶然として表す言葉であり、説明の際には“toxic parents (毒親)”など英語圏で理解されやすい表現を用いた。このような翻訳方針は、語のもつ文化的豊かさを保持しつつ、国際生にも字義的・比喩的な意味を理解可能とするためのものである。このアプローチは、言語と文化の相互関連を重視する言語文化学の原理 (Newmark, 1988) に基づくと同時に、翻訳の目的志向性を強調するスコポス理論 (Pym, 2014) にも適合している。

### 3.3 学士課程全体へ広がる「学習者主体の学び」

「知の探研 7 か条」の各条は、「知の探研は～となります」あるいは「知の探研は～を大切にします」という文で締めくくられている。例えば第 4 条「現在地を知らせ合う」では、「『知の探研』は、チームで取り組む課題を提示し、学びの過程を大切にしながら、振り返りを習慣化する機会となります」と記されている。では、7 か条で示される姿勢は、1 年次の科目「知の探研」にのみ適用されるのだろうか。あるいは、「関心を寄せる (第 1 条)」や「差異を認め合う (第 7 条)」といった態度は、「知の探研」以外の授業では重視されないのだろうか。

本学が学士課程教育で掲げる「養成する人材像」には、以下の 5 つの力が明記されている。

- 自ら進んで、課題解決に挑む実践力
- 自ら問うて、課題を見出す探究力
- 語り聴くことを通して、差異から学ぶコミュニケーション力
- 基礎的かつ体系的な専門力
- 自然や社会に関心を持ち、学びを習慣化する力 (教養力)

これらに照らせば、7 か条は特定の科目に限定される理念ではなく、学士課程 4 年間を通じて学習者主体の学びを支える基盤であることが理解できる。GDP においては、最終学年最終学期に IOK III を配置し、それまでの各学期においても 7 か条を実践する授業を随所に設けることで、学びの一貫性を確保している。そこで英語版の 7 か条では、「IOK では～」と限定的に記述するのではなく、学士課程全体に広がる「学習者主体の学び」の態度として表現するよう改めた。

## 4. 終わりに

本稿では、学士課程改革の一環として導入された課題探究科目「知の探研」を、GDP 生向けに英語版 “*Inquiries of Knowledge (IOK)*” として開講した初年度の取り組みを報告した。オンデマンド型オンライン授業の再構築や、文化的コードを含む用語の翻訳を通して、教材の単なる英訳にとどまらず、多文化共修を実現するための教育的工夫が不可欠であることが明らかとなった。

こうした取り組みは、学習者主体の学びを学士課程全体へと広げ、協働的かつ探究的な姿勢を育成する基盤となり得る。今後も本学において、多様な背景を持つ学生が互いに学び合い、国際的な学習共同体を形成していくことを期待したい。

## 注

- (1) 岡山大学ホームページより ([https://www.ipec.okayama-u.ac.jp/page\\_2138/](https://www.ipec.okayama-u.ac.jp/page_2138/)) 2025 年 9 月 16 日アクセス
- (2) 桃太郎フォーラム 2025 プログラム案内より ([https://www.okayama-u.ac.jp/up\\_load\\_files/event/R7forum\\_20250929.pdf](https://www.okayama-u.ac.jp/up_load_files/event/R7forum_20250929.pdf)) 2025 年 9 月 16 日アクセス
- (3) ただし第 7 条では、教員 1 名に代わり男女 2 名（所属先不明）が対話に参加している。

## 引用文献

- 岡山大学 (2024). 『大学案内 2025』岡山大学
- Loveday, L. (1986). *Explorations in Japanese sociolinguistics*. John Benjamins Publishing.
- Newmark, P. (1988). *A textbook of translation*. Prentice Hall.
- Okayama University (2024). *Okayama University Outline 2024-2025*, [https://www.okayama-u.ac.jp/up\\_load\\_files/freetext/ou-outline/file/ou-outline\\_en.pdf](https://www.okayama-u.ac.jp/up_load_files/freetext/ou-outline/file/ou-outline_en.pdf) 2025 年 9 月 16 日アクセス
- Pym, A. (2014). *Exploring translation theories* (2nd ed.). Routledge.